

## 疑似性格理論としての血液型性格関連説の多様性<sup>1-3)</sup>

上 村 晃 弘      サトウ タツヤ  
大阪滋慶学園      立命館大学

血液型性格関連説は日本で人気のある疑似性格理論の1つで、1920年代の古川竹二の仮説に由来する。現在では多くの提唱者がこの仮説を様々に解釈している。したがってこの説には多様性がある。本研究では、最近の「血液型ブーム」においてTV放送された説を伝統的説明、生物学的媒介、枠組利用、剰余特性付加の4つの型に分類した。伝統的説明型は古川の仮説の後継である。生物学的媒介型は、血液型と性格の関係を進化論や脳科学などの新しい学術的知識を用いて説明する。枠組利用型は単に古いに用いている。剰余特性付加型は提唱者の専門分野で見出された特性を追加した程度である。すべての提唱者の説は論理的妥当性をもたない。

キーワード：血液型性格関連説、多様性、疑似性格理論、進化論、脳科学

### 問 題

現代の日本にはABO式血液型と性格に関係があるという考え方があり、血液型性格判断、血液型人間学、血液型占いなどと呼ばれている。佐藤・渡邊(1991)は否定的立場からではあるが、この考えを「血液型性格関連説」と命名した(以後、関連説と呼ぶこともある)<sup>4)</sup>。この仮説は、古川竹二の「血液型による気質の研究」(古川, 1927)に遡ることができる(溝口〔1986〕はこの

説を血液型気質相関説と呼んでいる)。ただし、古川の提唱以降300もの追試が行われた結果、学問的には妥当性がないと判断されるに至った(溝口, 1994a; 佐藤, 2002)。その後、心理学分野で血液型と気質や性格に関係があるとする信頼できる知見は提出されておらず、その意味でほとんどの心理学者はこの考え方に懐疑的であると言える。

しかし、能見正比古(1971)が『血液型でわかる相性』を発刊して以来、この説は多くの日本人の考え方に採り入れられ始めた。日本では80年代半ば、90年代半ば、そして2000年代半ばとほぼ10年に一度の周期で社会的ブームと呼べるほどの流行が見られている。1990年初頭までの動向をレビューした佐藤・渡邊(1992)によると、様々な調査において約6割の人々が血液型と性格の関係を認めているようなのである。能見の書が発刊された当時から、血液型性格関連説は科学的に正統な知識とはされていない。このことは学校の教科で教える内容に含まれないことから傍証される。したがって、関連説に関する情報伝達には生活上

- 1) 本論文は、日本パーソナリティ心理学会第13回大会、第14回大会での発表に加筆修正したものである。
- 2) 本研究は、日本学術振興会：人文・社会科学振興のためのプロジェクト研究事業「ボトムアップ人間関係論の構築」の援助を受けた。
- 3) 本論文作成に当たり、貴重な助言を戴きました日本大学名誉教授大村政男先生に心より感謝致します。
- 4) 「血液型ステレオタイプ」と呼称している研究者もいる(例えば、詫摩・松井, 1985)。この名称を用いた研究についてはそのまま引用した。

のチャンネルが使用されているはずである。

ところで2004年2月21日から約1年間、約70本もの血液型性格関連説に関するTV番組が放映された。これらの番組では血液型と性格の関連を肯定していた。放送倫理・番組向上機構（略称BPO）から勧告が出された結果（2004年12月）、2005年2月でこうした番組がほとんど放映されなくなったことから分かるとおり、TV番組供給側はこれを「真実の知識」として伝えていたわけではない。だが、番組内の諸説は「偽であること」を標榜していたわけではないから「真実の知識」のように見せる演出があったと言える。一般視聴者がどのように解釈していたかは難しいが、一般的にTV番組が否定的に扱わない限りは肯定的に扱っていることを前提とするであろう。

血液型性格関連説がTVで繰り返し提示されるなら、それらは視聴者にとって自身や他人の性格を説明する体系として内在化されるだろう。その意味で、どのような性格理解の方法が人々に提供・受容されているのかを知ることは、日本の性格心理学（パーソナリティ心理学）にとっても重要な問題の1つである。

最近の科学技術社会論では「専門家と非専門家（市民）」の関係が議論されている（Wynne, 1995；井山・金森, 2000）。かつては、科学と疑似科学の関係は絶対的に上下関係であると考えられており、疑似科学を信じる市民を啓蒙するという論調もあったが、今日では科学者も含む市民が、科学的とされる知識をどのように理解しているのかを研究することも重視されている。つまり、市民が実際にどのような言説に接して、血液型と性格が関係しているという信念を強化しているのかを知ることも重要であると考えられるのである。また、科学技術社会論では科学を理念志向型研究と特性指向研究とに分けることがある（藤垣, 1995）。前者においては、対象の特性を超えた一般化をめざすが、後者では対象の特性を記述することを第一に考える。前者では一般化のための手

続き（例えば一致率算出）などが研究の妥当性にとって重要となるが、後者においてはそうした妥当性は重視されないのである。本研究は後者の立場で丁寧な記述を目指すものである。

本研究では、TV番組で採り上げられた血液型性格関連説についてその内容を分析することを目的とする。また本研究は、パーソナリティ心理学周辺の一般的知識に関する一種のフィールドワークである。血液型との関係でどのような内容の性格説が存在するのかということを知ることにより、人々がパーソナリティの学説やパーソナリティ心理学に求めるものについても理解が可能になるだろう。方法としては観察と記述・分類枠の生成による理解というエスノグラフィ的手法（箕浦, 1999）を用いる。すなわち、人々のパーソナリティ観について仮説生成的な検討を行うのである。

心理学によるこれまでの関連説批判は、「血液型と性格には関係がない」のような大ざっぱな主張の形を取りやすく、なぜこれほどまでに人々がこの考え方を受容し重視するのか、あるいは個々の説にはどのような問題点が潜んでいるのか、ということについては検討してこなかった。本論文では、佐藤（1993）と同じくTV番組の内容を最初から否定することはせずに学説の一種として考え、その論理的特徴を取り出して批判的検討を加えることを目的とする。そのため取り扱う説やその主唱者について匿名で扱うこともしなかった。

## 方 法

以下の方法で資料としてTV番組を収集した。2004年2月21日から約1年間に関西地区で放映された血液型性格関連説に関するTV番組（地上波アナログ放送）について、新聞、TV雑誌、インターネットのTV関連サイトなどで放送前に知るよう努め、録画した。同年11月29日以降はソニー製HDD搭載DVDレコーダRDR-HX70を使用し、「血液型」をキーワードとした自動録画機能も用いた。ただし、フジテレビ「とくダネ！」

の「今日の占い! 血液型選手権」と毎日放送「ちちんぷいぷい」の「血液型ぷいぷい占い 明日の運勢」は検討対象から除外した。

## 結 果

収集できた番組は62本であった。このうち本稿で直接言及した番組の一覧をAppendixとして掲げる。この中にはのべ70件の説明があり(1つの番組で複数の説が出てきた場合には個別に扱った)、著者らの分類では10の型にまとめることができた。これら10の説の特徴や論理について以下で検討していく。溝口(1994b)は既に論者を区分して検討しているが、本稿では説明の内容で分類した。同じ人物が複数の説を提唱していたこともあったからでもある。なお、個々の仮説や型の名称は若干の例外(後天性血液型, 40パターン)を除けば著者らが命名したものである。

### 1. 伝統的説明

古川の学説を受け継ぐもので、血液型と性格が——原理はともかくとして——、相関しており関係があるということを主張するものを「伝統的説明」とした。70件中51件で使用されていた。

能見正比古(1980)から彼の考え方の根本を要約すると次のようになる。「血液型は血液だけの型ではなく、その型物質は全身に分布している。血液型が違えば全身を構成している材料物質が違ふということになる。材料が違えば、その機能や特性が違ふのは当たり前である。血液型が人間の体質気質の個性と関連するのは当然のことである。」

各血液型のイメージを調べるために、番組No. 2では「～型の人にはどんな性格ですか」というアンケートを1000人に行った(おそらく複数回答可=データ収集法が不明なのは実証研究としては不十分)。その結果、A型は「神経質(48%)」「几帳面(22%)」という回答が多かった。B型は「自己チュー(=自己中心的)(55%)」「気分屋(25%)」、O型は「大ざっぱ(44%)」「まとめ上手

(25%)」、AB型は「二面性(45%)」「ワケがわからない(20%)」となり、一般に言われている特徴と一致していた。

### 2. 進化論的説明

血液型による性格の違いが、血液型の進化や歴史に由来するという説を「進化論的説明」と呼ぶ。使用件数は4件であった。血液型によって免疫力に違いがあると、そこから性格を説明しようとするのもこの説に含めた。D'Adamo & Whitney(1996)は、次のような説を唱えている。人類には初めO型しか存在しなかったが、様々な環境の変化に適応するためにA型とB型ができた。A型のルーツは農耕民族でB型のそれは遊牧民であるという。A型とB型が会って生まれた比較的新しい血液型がAB型で、A型とB型両方の特徴を併せ持っているとしている(番組No. 1)。

D'Adamo & Whitney(2001)は、血液型と性格が関係するという根拠の1つとして次の例を挙げている。ABO式血液型を決定する遺伝子は、第9染色体の長腕(q)の3番目の大きなバンドの中の4番目の小さなバンド(9q34)にある。ここにドーパミンをノルアドレナリンに変える酵素、ドーパミン-β-ヒドロキシラーゼ(DBH)の遺伝子がある(Craig, Buckle, Lamouroux, Mallet, & Craig, 1988)。D'Adamo & Whitney(2001)は、この性格に関係すると思われる神経伝達物質の遺伝子が「まさに、血液型遺伝子の真上にあるようなものだ」と述べている。

澤口は血液型による免疫力の違いがあると、A型が繊細で慎重なのは免疫力が弱いため、O型が大胆なのは免疫力が強いためと解釈した(番組No. 4)。能見俊賢も同様である(番組No. 6)。後述する口石は、本人がO型で両親もO型の人是最も健康で、A型で両親もA型の人是最も不健康としている(番組No. 14)。これらの説のオリジナルは竹内(1994)である。澤口は、O型の人にはナチュラルキラー細胞など免疫系の細胞が多いということをつけ加えている(番組No. 9)。番組

No. 7で澤口は、「血液型は基本的に病気との関係で進化し、各地域の過去の病気や病原菌への抵抗が関係している」と述べ、日本のO型は免疫力が強く病気にかかりにくいために大胆で社会的になり、日本のA型は免疫力が弱いたので几帳面、慎重になったとした。一方、インドではO型が過去に流行したコレラに罹患しやすかったために慎重になったという。

### 3. 脳・糖鎖説

浅尾(2004)は、脳細胞にあるABO式血液型物質(糖鎖でできた抗原)によって脳細胞の性質が異なるという。これを「脳・糖鎖説」と呼ぶ。使用件数は3件であった。浅尾はこの説を基に、血液型によって優勢な脳の部位が異なり、これが思考パターンに反映されるとした。この説を「脳・部位説」とする。浅尾はこれらを1つの仮説としているが、紹介された番組が異なることや部位説のみの研究者がいるのでここでは分割した。部位説については次項で述べる。

浅尾は、脳細胞の血液型物質によって神経細胞間の接近のしやすさや興奮の抑制の受けやすさが異なるとした。ABO式血液型物質の荷電状態から理論上、A型の神経細胞は互いに接近しやすく、B型は接近しにくく、O型は中くらい、AB型はしやすいこともしにくいこともある(A型とB型が混在)とした。そのために、A型は弱い興奮でもシナプスが新成されやすく、シナプス総数も多くなって抑制性シナプスも形成されやすいとした。そのために大脳辺縁系からの衝動は分散または抑制されるという。B型のシナプス形成には強い興奮が必要で、抑制性シナプスも形成されにくいとした。辺縁系からの衝動は調整を受けずに行動を引き起こすという。O型の抑制されやすさは中くらい、AB型はA型かB型のどちらかの反応とした。

脳・糖鎖説を脳全体の働きと考えると、次の実験を紹介する。番組No.10で吉田は各血液型の男女5名ずつ、計40名で次の実験を行った。実験協力

者の目の前にランプを設置し、実験協力者は目を閉じた状態でランプが点いたら手元のボタンを押し、消えたらボタンを離した。その間の脳波を測定した。A型とO型の結果は、光に脳が大きく興奮し、光が消えた後も興奮度は増した。B型の興奮はさほど大きくはなく、光が消えた後もすぐに興奮が収まった。AB型はB型よりも脳の興奮度が高いが、光が消えると急速に収まった。

### 4. 脳・部位説

使用件数は4件であった。ただし、純粋に部位を指している場合の他に、澤口がドーパミンのはたらきについて言及したこと(後述)もこの件数に数えた。ドーパミンは、主として前頭葉に投射しているからである。

浅尾は番組No.2で、A型は記憶を司る側頭葉や海馬が働きやすく、過去の記憶が引き出されやすいとした。以下、B型は発想・行動を司る前頭葉が働きやすく、行動的で感情も左右されやすい。O型は感覚を司る後頭葉・頭頂葉が働きやすく、後頭葉は視覚、頭頂葉は聴覚で目の前の状況を把握したがるタイプとした。さらに彼は、AB型には海馬・側頭葉優勢になる時と、前頭葉が優勢になる時があるとし、この切り替えによって二面性を説明しようとした。同番組で灰田は実験協力者に絵を見せ、脳機能イメージング技法を用いて血液型別の脳の活性を調べた。彼は、A型の言語野(ブローカ)の活動が他の血液型と比べて優勢であったとした。絵を見ながら理論的に頭を働かせていたと解釈して、A型を理屈っぽい性格とした。

番組No.10では、灰田が光トポグラフィを用いて脳の活性を測定し、血液型と相性について検討した。各血液型に初対面の男女1名ずつの計8名で、16通りの男女の組み合わせで測定した。実験協力者たちは、容姿による影響を避けるために目隠しをして会話した。相性については次の観点で判断した。初対面の場合、普通は全体が緩やかに働くという。相手に関心があれば、相手を想像するために後頭葉が活性化するとし、楽しんでいた

り、イライラするといった感情は前頭葉でわかるとした。相性がよい場合の組み合わせは、どちらも緩やかに活性化したり、後頭葉だけが活発に働いて互いに似たパターンになるとした。以上のパターンと、番組で収集した各血液型男女 1000 名ずつの計 8000 名のアンケートから作成した相性ランキングの組み合わせを照合した。その結果、相性が悪いとされたいくつかの組み合わせで脳の活性部位が異なり、相性の悪さが証明されたとした。

### 5. 気質の 3 次元説

大村は Cloninger の「気質の 3 次元説」を援用して、血液型によって後述の質問紙のプロフィールが異なるとした（番組 No. 11, 16）。大村は否定論の代表格であったが、この番組で肯定的結果を報告して関連説に関心のある人々を驚かせた。使用件数は 2 件であった。

Cloninger, Svrakic, & Przbeck (1993) は、新奇性追求 (Novelty seeking), 苦痛回避 (Pain avoidance), 報酬依存 (Reward dependence), 持続 (Persistence) といった遺伝的に独立した性格因子があるとした。そのうち持続以外の因子が独立した遺伝要因に由来するとした (Stalling, Hewitt, Cloninger, Heath, & Eaves, 1996)。新奇性追求とはいわゆる好奇心で積極性と関係し、神経伝達物質のドーパミンが関与するという。苦痛回避とは嫌なものを避ける傾向で、慎重さの指標となる。セロトニンと関係するとしている。報酬依存は見返りを期待する性質で人づきあいと関係し、ノルアドレナリンが関連するという。

大村は、Cloninger が開発した Temperament & Character Inventory (TCI) の一部から日本人向けに改良した質問紙を作成した。この質問紙を番組 No. 11 では、A 型 49 名、B 型 31 名、O 型 35 名、AB 型 14 名に、No. 16 では 18 歳～87 歳の男女 746 名（血液型別の人数は不明）に実施した。両番組で同様の傾向が見られた。A 型は苦痛回避の値が最も高く、次は報酬依存、新奇性追求の順となった。B 型は新奇性追求が特に高く、報酬依存と苦

痛回避がやや低めとなった。O 型は報酬依存が特に高く、新奇性追求と苦痛回避が低くなった。AB 型の各因子の差は他ほど大きくなく、全体的に 3 つの傾向をバランス良くあわせ持っているとした。ゆえに巷間で言われている傾向と類似しているという。しかし、個々人について調べると、血液型の特徴が「強い人」と「弱い人」がいた。

### 6. 後天性血液型

口石は占い師で、最近はおフェリア・麗と名乗っている。彼女が主催する G・ダビデ研究所は雑誌『anan』など現在 40 誌以上で占いの連載を持っており、一部の若い女性に対する影響力は小さくはない。口石は、成長するにつれて環境からの影響や出生順位によって本来の性格が変化することがあると述べ、変化後の性格がどの血液型に近いかを「後天性血液型」、あるいは裏血液型と呼んでいる (G・ダビデ研究所・TOKYO★1 週間編集部, 2003 : 番組 No. 5)。使用件数は 1 件のみであった。

### 7. 40 パタン

口石はまた、両親と本人の血液型（例えば、父親が A 型で母親が O 型の A 型など）で、40 のパターンに分類できるとした (G・ダビデ研究所, 2005 : 番組 No. 14, 17)。使用件数は 2 件であった。番組 No. 14 ではこの 40 パタンの恋愛運と健康運のランキングを発表した。

### 8. 生年月日と体型との折衷説

鈴木芳正は、番組 No. 18 で血液型と生年月日と長身や肥満といった体型を組み合わせで性格や相性を判断した。これを「生年月日と体型との折衷説」と呼ぶ。使用件数はこの 1 件のみであった。

### 9. カラーセラピー説

泉は、「カラーセラピー」の理論で血液型による色の好みを解釈した (番組 No. 15)。使用件数は 1 件であった。泉は欧米で脚光を浴びている「オーラソーマ式カラーセラピー」を行っている。その人が選んだ色から行動や深層心理、精神的、身体的な問題点を探るという (泉, 1998)。泉は

色の意味と血液型の特性が合致することが多いと述べ、各血液型にシンボルカラーがあるとした。例えばB型は黄色で、黄色が好きな人は個性的でよく主張をし、B型がマイペースで個性的ということと一致するという。

## 10. 音響説

音響研究で著名な鈴木松美は、血液型によって癒される音が異なるとした(番組No. 15)。これを「音響説」と呼ぶ。使用件数は1件であった。彼は、各血液型3名の実験協力者に4種類の音を聞かせて $\alpha$ 波を計測した。その結果、O型だけが虫の声での平均値が高くなり、虫の声で最もリラックスできたと解釈した。O型は子供っぽく、子供は虫の声や歌が好きであるからという。

## 11. 否定的説明

番組として否定的立場であったのはNo. 20<sup>5)</sup>のみであった。この番組では能見俊賢の見解と浅尾の脳・糖鎖説を肯定説として採り上げ、4人の否定的見解が紹介された(後述)。番組No. 20は、「血液型による性格分析は30万人という膨大なデータをもとに作られたれっきとした統計学である説」を信憑度20%とした。

「決定! これが日本のベスト100」では、否定論者志賀のコメントを3回放送したが、放映時間全体の比率で言えばごくわずかであったと言わざるを得ない。彼は、「血液型が脳のはたらきに影響を与えることは科学的に立証されていない。後天的な個人の努力などに負うところが大きい(番組No. 12)。」などと述べ、心的現象は脳のはたらきであり、それには血液型は関与しないという立場で否定した。

## 考 察

結果で述べた説明について、以下で論評していく。

## 1. 伝統的説明

番組No. 2のアンケートが巷間で言われている特性と一致していたことは、血液型性格関連説の日本での浸透度、すなわち「知識の汚染」や「選択的認知」から考えれば、驚くには当たらない。池田(1993)は次のように述べている。『『血液型性格判断が正しい』という信念を持つと、『ある人の行動はその性格ゆえに生じ、それは血液型に規定されている』と预期することになり、当てはまらない事例は無視され、当てはまる事例のみが知覚され、記憶されることになる。その結果、『やっぱり当たってる』と信念が確証されることになる。』

上瀬(2002)は、「血液型ステレオタイプの自動的活性化」を挙げている。多くの日本人は、各血液型の特徴についての知識のネットワークを形成している。血液型に関する手がかりが環境にあると、この知識をよく用いている人ほど、特性や行動に関するステレオタイプの知識がすぐに活性化するという。

池田(1994)は、血液型ステレオタイプの自己成就現象について述べている。番組No. 4では、B型の人は「自己チュー」と自分でわかって行動しているという説明があった。番組No. 19では、あるタレントが「父親から自分はAB型だと聞かされていたが、最近調べると本当はO型であった」というエピソードを披露した。「AB型は二面性があると言われているが、今考えると無理して二面性を作っていた」と述懐した。

肯定論者は一般に各血液型の特性を多く挙げて、当該血液型の誰にでも当てはまる素地を作っている。すなわち「バーナム効果」である。提唱者間で血液型による特性に矛盾があることについては、草野(2001)はこう述べている。「研究者が違えばどの血液型がどのタイプかという説も違って当然という反論は、その限りではありうる。しかし、血液型性格判断を信じる人というのは『〇〇説に限って信じる』というわけではなく、とに

5) 放送日は関東では2004年11月21日、関西では2005年2月12日。

かく当てはまっていれば『当たったぁ』となる。』

TV番組では情報提示の方法を単純化せざるをえず、少数の特性しか挙げていない。結果として血液型ごとの特性を「きめつけ」的に記述することになり、批判を浴びる一因となった。2004年11月27日付の毎日新聞は次のように報じた。「今春から血液型性格判断を扱うテレビ番組が増えている。特定の血液型を『いい加減な性格』『二重人格』などと決めつける内容が目立ち、BPOには、視聴者から『子供がいじめを受けた』『一方的な決めつけで不快』などの抗議が4月以降、50件以上寄せられた。」

## 2. 進化論的説明

山本と箱守らのグループは、A型がプロトタイプであり、その変異によってB型とO型が生じたと結論づけている (Yamamoto, Clausen, White, Marken, & Hakomori, 1990; Saitou & Yamamoto, 1997)。したがって、D'Adamo & Whitney (1996)のO型が最初に現れたという説は誤っていることになる。

NATROM (2005)のWebページによると、実際はDBH遺伝子とABO式血液型の遺伝子の位置は離れており、これらの連鎖不均衡が起こることは極めて例外的であるという。よってDBH遺伝子で血液型と性格の関連を示すことはできない。同ページによると他にも肯定論者が提示する医学的論文はあるが、どれも血液型と性格の関連を示すのには不十分であり、それらから飛躍した結論が導かれているという。

安藤 (2000)によれば、性格などの心理的形質は非常に多くの遺伝子の相加的、非相加的効果の総体から生まれるものであり、特定の1つまたは少数の遺伝子を原因遺伝子とすべきではないという。また、環境の影響も大きく、その交互作用も複雑である。したがって、仮に血液型遺伝子と少数の心理的形質に関する遺伝子に何らかの関係があることが見出されたとしても(どの程度をもって遺伝子の多寡を言うかは考慮しなければならな

いが)、巷間で言われているほどの差異が生ずるとは考えにくい。

澤口は「AB型は2つの遺伝子型が混在し、思わぬ組み合わせにより豊かな発想を生む。天才肌が多い」と述べた(番組No.1)。これは単なる対立遺伝子のヘテロ接合である。血液型遺伝子が2種類あると、なぜ天才肌になるのか。AOやBOもヘテロ接合であるがこの場合はどうなのか。澤口の発言には何の根拠もない。

血液型と免疫については、D'Adamo & Whitney (1996)は、「A型は免疫系が弱くて感染症にかかりやすく、O型は強い免疫系で感染症にかかりにくい」と述べているが、一般的なウィルス感染はO型に起こりやすいという記述もある。D'Adamo & Whitney (2001)では、現在はO型が生存に有利としているが、絶対視しておらず、「様々な時代や場所では他の血液型だったらと思うO型は多く、地域によってはA型になりたいという人も多いだろう」とも述べている。血液型と感染症の関係は、血液型性格関連説の肯定論者でなくても議論されている。例えばRidley (1999 中村・斉藤訳2000)は、ある血液型はある病気に罹りやすい傾向があっても、別の病気には耐性があるというように、血液型間でおおよそバランスが保たれていると述べている。彼は血液型だけでなく、遺伝的にある病気には罹りやすくても、別の病気には罹りにくい例も挙げている。番組No.6では「B型はウィルスに弱く、悪性インフルエンザ・各種感染症に注意」とされた。また、日本では江戸時代にコレラが流行したが、前述のとおりO型が最も弱い。したがって日本において必ずしもA型の免疫力が弱く、O型の免疫力が強いとは言えない。番組No.7でも日本においてA型の免疫力が弱く、O型が強いという根拠は示されなかった。

そもそも、感染症に罹りやすいことと性格の関係も明確ではない。よって免疫力の違いを媒介とした説明は、飛躍していると言わざるを得ない。

### 3. 脳・糖鎖説

糖鎖が脳組織に与える影響については、マウスの海馬で HNK-1 糖鎖が欠損すると、記憶学習能力が低下することが見出されている（川崎, 2003）。成松（2003）は血液型と性格の関係を肯定しているが、ABO 式血液型物質だけでなく、ありとあらゆる神経で発現している糖鎖の変異多型が性格と関係するという。多数の糖鎖が影響するということは、ABO 式血液型物質の影響が相対的に少なくなるとも換言できる。しかも Zmijewski（1978）によれば、ABO 式血液型の反応率は、胃に対する反応率を 100% とすれば、十二指腸（90%）などと比較して脳細胞は最も低く（8%）、ほとんどないと言ってよい。肯定論者は、少なくとも血液型物質が脳に存在するというに意義があると主張するが、その寄与の大きさは不明で、可能性のみで肯定論の根拠にはできない。脳細胞上にある ABO 式血液型の糖鎖の割合が大きければ、浅尾の言う電荷による接近の可能性も考えられる。しかし、実際はわずかであるから、他の多数の糖鎖で相殺されてしまうのではないだろうか。

番組 No. 10 の吉田の実験は浅尾の見解と食い違っている。浅尾は A 型の興奮が抑制されやすいとしているが、この実験では光が消えた後も興奮度は増していた。また浅尾は、B 型は抑制されにくいとしたが、光が消えると興奮はすぐに鎮まった。

### 4. 脳・部位説

前述の解釈について、まずは血液型によって脳の活性部位に差があるのかどうかを実証する必要があるが、現時点でも問題点がある。浅尾の A 型が側頭葉や海馬優位であるとする根拠は、側頭葉の介在ニューロン間のシナプスには微弱な興奮もあり、それによって神経回路が新成されるためという。シナプス総数が多くなるとしたことは前述したが、これだけでは別段、側頭葉が優位ということは導出できない。彼は、A 型の思考パターンを記憶や経験による過去型であるとしている。ここ

からの推測で、A 型の側頭葉のシナプスを実測したわけではない。またブローカ優位という灰田の実験結果とは相違している。さらに論理的、理屈っぽいとする A 型の特性であるが、鈴木（1986）は、A 型を動かすものは感情であり、その背後には理性的な一貫性はないとしている。また、聴覚中枢は頭頂葉ではなく側頭葉である。空間認識を司る頭頂葉が優勢ならば、なぜ O 型は「大ざっぱで整理整頓が苦手」なのか。この部位説の前提である糖鎖の影響も上述のように不明瞭である。当然、A 型と B 型を前提とした AB 型の解釈も困難となる。

番組 No. 10 の灰田の実験では、相性がよい例として放送されたのは B 型女性と O 型男性のみで、互いに緩やかな活性であった。だが、仮にほとんどの組み合わせで活性部位が異なり、最も相性がよいとされた 1 例の組み合わせが、普通の初対面の場合と区別しにくい緩やかに活性化という結果でも、上述の相性の解釈が可能である。相性を脳の活性部位の相違で測定しうるものであるのかも疑問である。またごく少人数の実験であり、これだけではとても一般化できない。

番組 No.9 では、社長に多い血液型の第 1 位は O 型の 36% となった。その説明として澤口は、O 型はドーパミンのはたらきがよく、計画性、冒険心、統率力があるとした。ドーパミンは、中脳の腹側被蓋野ないし被蓋から大脳辺縁系の帯状回、嗅結節、側座核、扁桃体中心核などに達し、情動行動を調節する。また、前頭連合野に投射して幸福感をもたらす。単純な比較はできないかもしれないが、浅尾の O 型は後頭葉、頭頂葉優位という説とは異なっているようである。

### 5. 気質の 3 次元説

番組 No. 11 の調査協力者は、血液型の番組ということを知った上で参加した人たちである。さらに血液型対抗の運動会をした後で、いわば血液型への帰属意識が高まったところで調査が行われた。知識の汚染や自己成就の影響は否めない。こう



いった調査を行う場合、血液型に関する調査であることを知らせず、質問項目の回答後に血液型を書かせるなどの工夫が必要である。個人差は血液型性格関連説を信じる人と信じない人の差とも考えられる。No. 16 での調査方法は不明である。

よって、3種の神経伝達物質と血液型の遺伝的な関係については、この調査だけではわからない。また、O型は報酬依存が最も高くなった。Cloningerは報酬依存とノルアドレナリンを結びつけている。澤口がO型はドーパミンのはたらきがよいと述べたこと (No. 9) は、これとも整合しない。

## 6. 後天性血液型

口石が言う後天性血液型とは、簡単な質問項目に答えて、現在の性格が一般的に言われるどの血液型の性格に近いかを見たものである。実際の血液型と組み合わせてより詳細な分析ができるという。だが、後述するように矛盾の多いものを組み合わせても不確かさが増すばかりである。

## 7. 40 パタン

口石は、これも従来に関連説よりも細密であるとしている。番組 No. 14 の恋愛運のランキングについては「血液型の基本的な性格から、愛情豊かな人はいい恋愛をするはずで、自分勝手な人は恋愛運がよくないはずである」と述べた。すなわち実証的データではない。健康運の根拠は、先述の免疫力の説が関係していると思われる。

## 8. 生年月日と体型との折衷説

生年月日を考慮するものは心理学の範疇ではない。

## 9. カラーセラピー説

泉 (1998) は、黄を選ぶ人を「神経を張り巡らす人」と形容し、論理的思考力に優れ、勤勉で集中力があると述べている。これはB型ではなく、一般にA型の特性とされるものに近い。また、選ぶ色と血液型の一致率がどの程度であるのか不明である。

## 10. 音響説

単なる試みかもしれないが、わずか3名ずつの試行数も少ない実験で、一般化できる結果が得られるとは思われない。

## 11. 否定的説明

番組 No. 20 の否定的見解は次の4つである。大村は、能見の唱える各血液型の特性をランダムに組み合わせて4つのリストを作成し、それぞれに血液型のラベルをつけた。これを実験協力者10名に見せたところ、8名が自分に当てはまると思ったことから (ラベリング効果)、関連説を「思い込み」として否定した。

張ヶ谷は、血液型はABO式以外にもルイス式、ディエゴ式、RH式など20系列400種類もあり、たった4種類に分類できるものではないと否定した。しかし、これだけではABO式が重要であるという肯定論は否定できない。池本は、例えば日本人とイタリア人の血液型の割合が似ているが、前者のきまじめな国民性と後者の陽気で明るいといった国民性の違いは説明できないとした。これは各血液型の性格には踏み込んでいない。

瀬戸は、能見正比古・俊賢が収集したという30万人のアンケートだけでは学術的根拠は薄いとされた。彼は、能見は結果を示しただけで (結果自体も疑わしいが)、原因を追求していないと述べた。例えば、A型が繊細というのは遺伝が原因なのか、環境によるのか、他に原因があるのかを究明しなければならないと言う。この論点は、前述の自己成就現象と勘案することができる。自己成就是肯定論者からはほとんど無視されているが、至極重要な問題である。仮に表面的に血液型と性格に相関が見られたとしても、自己成就に由来していれば血液型自体が原因なのではない。また、各血液型に別のラベリングがなされていれば、別の性格になるという可能性もある。自己成就現象と、血液型と性格の遺伝的関連とは厳密に切り離して考えなければならない。

## 総合考察

血液型性格関連説に関する心理学側からの研究は、性格心理学による妥当性の検証や社会心理学における社会的認知研究などいくつかに分けられる。本研究では広い意味での血液型性格関連説について、2004年2月から1年間の期間にオンエアされた番組で採り上げられた考え方を対象に、その内容について検討した。つまり、これまで手つかずであった提供者側の論理についてTV番組を対象にその内容分析を行ったものである。

TV番組でしか扱われない（論文化されていない）知識は、学問の世界では検討に値しないという批判もありえるだろう。だが、ここで問題にしたいのは、制度的科学以外から提供された知識の内容やあり方そのものであり、しかもそれが制度的科学よりも知られているのだから、批判的検討に値するだろう。

### 1. 諸理論への包括的見解

関連説を肯定する側は狭い意味での心理学にとどまった仮説を提示しているわけではなく、遺伝学や免疫学、脳科学、糖鎖生物学、カラーセラピー、音響学など多様な領域と関連づけている。

次に、こうした考え方を俯瞰する枠組を考えてみたい。するとこれらの説明は、血液型自体の4分類を重視するかどうか、また科学性を指向しているかどうか（実際にその指向が科学的であると認められるかどうかは別として）という、2次元軸上に配置できる4つの型に概ねまとまるのではないかと思われた。この仮説をFigure 1に示す。各象限の境界が破線であるのは、隣との型の区別が厳密なものではないということと、多少の例外があるということを示している。

**伝統的説明型** 性格を血液型との関係で説明すること自体を尊重しており、古川の学説を受け継ぐものである。なお、能見俊賢らも血液型の糖鎖や免疫力などに注目しており、血液型の差異を作り出す生物学的基礎の探究は行っている。しかし、

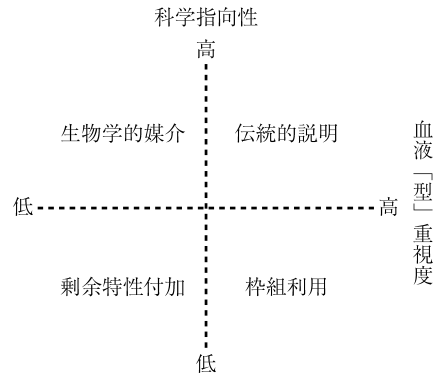


Figure 1 血液型性格関連説の説明の2次元配置仮説

あくまでも血液型の違いと性格の違いの相関関係をベースに説を構築しており、次の「生物学的媒介型」とは異なり、他の生物学的要因を性格の説明のために援用することはほとんどない。

**生物学的媒介型** 血液型と性格の関係を説明するために他の生物学的媒介変数で補完し、その生物学的基礎の確かさを根拠に説得力を増そうとするものである。進化論的説明、脳・部位説、脳・糖鎖説（これはある意味血液型そのものと言ってもよいが）、気質の3次元説がここに入る。これらを合わせた件数は70件中13件であった。進化論の妥当性や脳科学を利用することの説得力を血液型と性格の関係に組み込み、そのような論理構成が信憑性を高めるようなアピールをしている。

**枠組利用型** 血液型の4分類を単なる分類枠組として利用している。後天性血液型、40パターン、生年月日と体型との折衷説は、各血液型の下位分類を設定して精緻化しようという意図は見受けられるが、実証的根拠に乏しい。科学的理論とはほど遠く、占いと同種と言ってよい。血液型の分類自体も生物学的基礎を重視しているというよりも単なる分類名称という扱いである。後天性血液型などはその最たるものであろう。これらの使用件数は4件であった。こういったものはパーソナリティ研究の俎上に乗せることすら躊躇される。

能見俊賢(2001)も、各血液型は代表的な4つ

の性格タイプに分かれるとしていた。Weber & Crocker (1983) は、ステレオタイプは「サブタイプ化 (subtyping)」によって維持されるとした。以上の下位分類はある理屈によって設定されたものである。厳密にはサブタイプ化とは相違するかもしれない。しかし、下位分類によって当てはまる人が増加することは疑いなく、これも関連説を信じることの一端を担っていると考えられる。

**剰余特性付加型** カラーセラピー説、音響説は血液型と性格の関係を包括的に体系づけているのではなく、提唱者の専門分野とも関係しているという程度の説である。血液型と性格の理論を厳格に構築しようとするものではない。血液型性格関連説が正しいことを前提としており、自らの専門とする領域の個人差を説明する目的で、血液型によって色の好みや音の好みが異なるという説明を付加している。自説の根本に関わるものではなく、あくまで剰余的特性を付加するものであるから剰余特性付加型とした。

以上、各説は血液型と独特の距離をもちながら、「血液型と性格」の関係を肯定していた。そしてそれらが結果的に血液型性格関連説の世界を構成することになっている。我々はこれらの全てに網羅的に接することはない。むしろ相互に支え合っている一部の情報しか知らず、それを血液型性格関連説として考えている。

大村 (No. 20) の否定は、関連説を「思い込み」とする心理学的な否定であるが、No. 11, 16 では著者らによって生物学的媒介型と分類された説明を大村は肯定している。志賀は特に生物学的な方面から否定している。纏纏の場合、原因は不明ということで、前述のように生物学と心理学の両方のアプローチが考えられる。張ヶ谷の否定は不十分であるが、血液型の4分類重視への異議と言える。池本の否定は、血液型の割合と国民性ということで、敢えて言えば生物学と心理学の視点から否定している。

## 2. 提唱者同士の不可侵的態度と番組間の矛盾

なお、今回採り上げた説の多くの提唱者たちは、相互に参照することや相互批判もほとんどしない。能見俊賢 (2005) は、浅尾の脳・部位説などいくつかの生物学的研究について言及している。また、G・ダビデ研究所 (2005) の「A型のルーツは農耕民族」といった記述に D'Adamo & Whitney の影響が見られる。しかしこれらは、溝口 (1994b) が挙げたような多くの提唱者がいる関連説の世界全体から見れば例外的である。後述のように公表の仕方にも問題があり、能見や口石ら多くの提唱者が提示したものは、他の研究者からは関連説を裏付ける科学的データとして用いられていない。したがって追試されることも少ない。提唱者間の交流は学術的理論の発表や議論には遠く及ばず、血液型性格関連説の世界として互いに協力して知識の蓄積を目指して行くという姿勢ではないと言える。このような状況は学術的でも科学的でもない指摘せざるをえない。

以下では、提唱者の交流がないことやTV番組での解釈が恣意的である例として、番組で紹介された特性などで見られた矛盾について指摘する。

例えば AB 型について、番組 No. 1 では協調性がないとしていたが、番組 No. 8 ではあるとしていた。番組 No. 2 では O 型をまとめ上手の血液型としていたが、番組 No. 13 では A 型としていた。東大生に多い血液型は、ともに赤門前で聞き取り調査したにもかかわらず、番組 No. 4 では B 型、No. 6 では AB 型となった。

No. 2, 3 の両番組は、浅尾が監修しているにもかかわらず、矛盾する解釈が多い。例えば、No. 2 では O 型を「今さえよければという考えになりやすく、大ざっぱな性格になるとも言える」としていたが、No. 3 では AB 型を「深く考えずにその場がよければいい、軽いノリの性質である」とした。また、No. 3 では AB 型を第一印象で動く感覚人間、見た目のイメージを重視し、直感で動く傾向があるとした。これは No. 2 の O 型に近い。この

ように論理的一貫性を欠いていて、番組 No. 3 では単に事後解釈していたに過ぎない。

番組 No. 2 では、AB 型の「わけがわからない」という特性について、次のようなエピソードが披露された。「AB 型の友人に誘われて、長時間かけて有名ラーメン店に出かけたが、その友人は長蛇の列に待ちきれずに別の普通の中華料理店に入ってしまった。しかも頼んだのはなんと天津丼だった。」しかし、酷似したエピソードが番組 No. 4 では、B 型がわがままに人を振り回すことを示すために用いられた。また B 型が冷蔵庫の扉を開け放しにするというエピソードは、大ざっぱという O 型でも解釈できる。番組 No. 6 と No. 21 では、血液型別のグループで焼肉の食べ方を比較していた。前者では鉄板で自分のスペースを決めて焼いたのは AB 型で、自分の世界が確立している AB 型の特徴とし、後者では同じ行動を A 型がとり、几帳面としていた。このように同じ特性や行動を都合よく解釈することもあった。

番組 No. 6 では、一流スポーツ選手に多い血液型第 1 位を O 型とし、スポーツで圧倒的な集中力を引き出せ、負けず嫌いの O 型はスポーツにぴったりとした。2 位は A 型で、完璧主義で自分を追い込んでも結果を求めるとし、さらに歴代横綱の 60% が A 型であるとした。A 型と O 型で日本人の約 7 割を占めるので、このような統計には意味がない。番組 No. 9 では、アテネオリンピック日本人メダリストの血液型で最も多いのは B 型で、集中すると周りの環境やプレッシャーに左右されないので大舞台に強いとした。つまりどのようでも解釈できるのである。

### 3. 本研究の意義と今後の展望

本研究は、血液型性格関連説を支持する多様な考え方についてその論理構成を検討したところに第 1 の意義がある。

それら現在の関連説において、学術的に肯定できる論理が提出されているとは言い難いことが明らかになった。これが本研究の第 2 の意義である。

それらは疑似性格理論と言える。血液型と性格の関係について、将来に何かが見出される可能性までは否定できないが、心理学者がそうした可能性を無条件に受け入れる必要はない。

肯定論者は否定論者と同じ土俵に立とうとしないことが多い。まず伝統的な仮説を継承している能見正比古・俊賢の血液型人間学について見てみると、第三者による検証が可能な学術論文として発表されていないことが指摘できる。「人の性格とその人の血液型とは関係がある」という仮説自体は科学的な仮説であるが（渡邊，2005），他の多くの研究者による検証と認証を受けるという科学としての基準を満たしていない。にもかかわらず、手続きとしての科学の側面を過度に強調しつつ血液型と性格の関係が実証されたと断言している点で、血液型人間学は科学とは認められない（こうした見解については NATROM〔2005〕など参照）。さらに、今回検討した他の多くの仮説も学問的な検討に値するかどうかは疑わしいものも多い。これは特に筆者らが「枠組利用型」に分類した説に顕著である。

さて「同じ土俵に立っていない」という批判は学問の側から見た話であるし、現在の日本では心理学を専門に学んでいる者以外では血液型性格関連説を素朴なレベルで肯定している人が多い。つまり、人々は肯定説を唱える側に説得されてしまっており、心理学者の否定論は人々に届いていないのである。どうしてこのようなことが起きているのだろうか。これは科学社会学的観点からも興味深い点である。既に見てきたように肯定説を唱える側は、一定の論理を構築し（それがたとえ本稿が批判するようなものであったとしても）、一定の論拠を示してきた。またそれだけではなく、ある種の実証的な証拠を提示していることも多い。そして 2004 年以降の TV 番組ではこうした証拠を積極的に採り上げ、それらが人々に好意的に受け止められた可能性もある。こうした証拠がどのように作られ、どのように人々に提示されたのか、

つまり TV 番組を媒介にした妥当性構築の方法について検討し、それが人々の受容にどう関わっているのかを検討することが今後の課題となるであろう。

#### 引用文献

- 安藤寿康 (2000). 心はどのように遺伝するか——双生児が語る新しい遺伝観—— 講談社
- 浅尾哲朗 (2004). 血液型と母音と性格 論創社
- Cloninger, C. R., Svrakic, D. M., & Przbeck, T. R. (1993). A psycho-biological model temperament and character. *Archives of General Psychiatry*, **50**, 975–990.
- Craig, S. P., Buckle, V. J., Lamouroux, A., Mallet, J., & Craig, I. W. (1988). Localization of the human dopamine beta hydroxylase (DBH) gene to chromosome 9q34. *Cytogenet Cell Genet*, **48**(1), 48–50.
- D'Adamo, P. J., & Whitney, C. (1996). *Eat right 4 your type*. New York: G. P. Putnam's Sons.
- D'Adamo, P. J., & Whitney, C. (2001). *Live right 4 your type*. New York: G. P. Putnam's Sons.
- 藤垣裕子 (1995). 科学知識と科学者の生態学——ジャーナル共同体を単位とした知識形態の静的分類および形態形成の動的把握—— 科学・技術・社会, **4**, 139–156.
- 古川竹二 (1927). 血液型による気質の研究 心理学研究, **2**, 22–44.
- G・ダビデ研究所 (監修) (2005). 最強! 血液型行動学入門——なんでこんなに当たるの?—— 主婦の友社
- G・ダビデ研究所・TOKYO★1 週間編集部 (2003). 後天性血液型でわかるアナタの本性と運勢 (2003 年版) 講談社
- 池田謙一 (1993). 社会のイメージの心理学——ぼくらのリアリティはどう形成されるか—— サイエンス社
- 池田謙一 (1994). 自己成就する偏見としての血液型ステレオタイプ 詫摩武俊・佐藤達哉 (編) 血液型と性格——その史的展開と現在の問題点—— (現代のエスプリ 324) 至文堂 pp. 139–145.
- 井山弘幸・金森 修 (2000). 現代科学論 新曜社
- 泉 智子 (1998). 色の暗号 クレスト社
- 上瀬由美子 (2002). ステレオタイプの社会心理学——偏見の解消に向けて—— サイエンス社
- 川崎敏祐 (2003). 脳をかたちづくる糖鎖 谷口直之 (編) ゲノム情報を超えた生命のふしぎ——糖鎖——クバプロ pp. 57–63.
- 草野直樹 (2001). 血液型性格判断のウソ・ホント かがわ出版
- 箕浦康子 (編) (1999). フィールドワークの技法と実際 ミネルヴァ書房
- 溝口 元 (1986). 古川竹二と血液型気質関連説——学説の登場とその社会的受容を中心として—— 生物科学, **38**, 9–20
- 溝口 元 (1994a). 昭和初頭の「血液型気質関連説」論争——古川学説の凋落過程 詫摩武俊・佐藤達哉 (編) 血液型と性格——その史的展開と現在の問題点—— (現代のエスプリ 324) 至文堂 pp. 67–76.
- 溝口 元 (1994b). 「血液型人間学」の情報発信源 詫摩武俊・佐藤達哉 (編) 血液型と性格——その史的展開と現在の問題点—— (現代のエスプリ 324) 至文堂 pp. 95–105.
- 成松 久 (2003). 血液型と糖鎖 谷口直之 (編) ゲノム情報を超えた生命のふしぎ——糖鎖——クバプロ pp. 44–56.
- NATROM (2005). 遺伝学からみた血液型性格判断 <http://members.jcom.home.ne.jp/natrom/Blood.html>
- 能見正比古 (1971). 血液型でわかる相性, 青春出版社
- 能見正比古 (1980). 新・血液型人間学 角川書店
- 能見俊賢 (2001). 「血液型」怖いくらい性格がわかる本 三笠書房
- 能見俊賢 (監修) (2005). 教えて! 『血液型』 すばる舎
- Ridley, M. (1999). *Genome: The autobiography of species in 23 chapters*. London: Fourth Estate.
- (リドレー, M. 中村桂子・斉藤隆央 (訳) (2000). ゲノムが語る 23 の物語 紀伊國屋書店)
- Saitou, N., & Yamamoto, F. (1997). Evolution of primate ABO blood group genes and their homologous genes. *Molecular Biology and Evolution*, **14**(4), 399–411.
- 佐藤達哉 (1993). 血液型性格関連説についての検討 社会心理学研究, **8**, 197–208.
- 佐藤達哉 (2002). 日本における心理学の受容と展開 北大路書房
- 佐藤達哉・渡邊芳之 (1991). 血液型性格関連説と人々の性格観 東京都立大学人文学部人文学報, **223**, 159–174.
- 佐藤達哉・渡邊芳之 (1992). 現代の血液型性格判断ブームとその心理学的研究 心理学評論, **35**, 235–269.
- Stalling, M. C., Hewitt, J. K., Cloninger, C. R., Heath, A. C., & Eaves, L. J. (1996). Genetic and environmental structure of the Tridimensional Personality Questionnaire: Three or four temperament dimensions? *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 127–140.

- 鈴木芳正 (1986). 血液型性格学 三笠書房
- 竹内久美子 (1994). 小さな悪魔の背中の窪み——血液型・病気・恋愛の真実—— 新潮社
- 詫摩武俊・松井 豊 (1985). 血液型ステレオタイプについて 東京都立大学人文学部人文学報, **172**, 15-30.
- 渡邊芳之 (2005). 血液型と性格 サトウタツヤ・渡邊芳之 モード性格論 紀伊國屋書店 pp. 93-147.
- Weber, R., & Crocker, J. (1983). Cognitive processes in the revision of stereotypic beliefs. *Journal of Personality and Social Psychology*, **45**, 961-977.
- Wynne, B. (1995). Public Understanding of Science. In S. Jasanoff et al. (Eds.), *Handbook of science and technology studies*. Thousand Oaks: Sage. pp. 361-388.
- Yamamoto, F., Clausen, H., White, T., Marken, J., & Hakomori, S. (1990). Molecular genetic basis of the histoblood group ABO system. *Nature*, **345**, 229-233.
- Zmijewski, C. M. (1978). *Immunohematology*. 3rd ed. New York: Appleton-Century-Crofts.
- 2005.10.12 受稿, 2006.4.9 受理—

## Blood-typing as a Pseudo-personality Theory and Diversity of Its Explanatory Styles

Akihiro UEMURA<sup>1</sup> and Tatsuya SATO<sup>2</sup>

<sup>1</sup>Osaka Jikei College

<sup>2</sup>Ritsumeikan University

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2006, Vol. 15 No. 1, 33-47

The hypothesis that blood type is related to personality, which we may call blood-typing, is a pseudo-personality theory that has been popular among Japanese lay people for some time. It all started with a paper by Takeji Furukawa in the 1920's. Today, there are many exponents of different versions of this hypothesis, which resulted in a diversity of explanatory styles. In this study we classified explanatory styles of the hypothesis, disseminated through television programs during the latest boom of blood-typing. We found four types: traditional, biological, framework, and traits-addition. Traditional varieties were put forth by successors of Furukawa's ideas. Biological-mediation versions tried to explain the relation between blood type and personality using such new academic knowledge as theory of evolution and brain science. Exponents of framework utilization merely used blood-typing in the context of fortune telling, whereas the last group simply added traits of their choice found in their own specialties, to the original hypothesis. We concluded that none of the varieties discussed here has been successful in providing sufficient logical basis for their claims.

**Key words:** blood-typing, diversity, pseudo-personality theory, theory of evolution, brain science

## Appendix 本稿で言及した TV 番組一覧

No.	放送日	制作	番組名	サブタイトル・コーナー名	説明・仮説
1	04/2/21	TBS テレビ	探検！ホムンクルス	血液型と性格は本当に関係あるのか!?	伝統的, 進化論
2	4/04	関西テレビ	発掘！あるある大事典 II	春の芸能人血液型スペシャル	伝統的, 脳・部位
3	6/03	フジテレビ	とんねるずのみなさんのおかげでした	4000人調査で新事実発覚・爆笑血液型診断	伝統的
4	6/05	TBS テレビ	脳力探検クイズ！ホムクル	ABOAB 血液型性格診断のウソ・ホント！ 本当の自分 & 相性... すべてわかるスペシャル	伝統的, 進化論
5	6/10	TBS テレビ	うたばん	血液型スペシャル	伝統的, 後天性
6	6/13	テレビ朝日	決定！これが日本のベスト 100	決定！血液型ランキング	伝統的
7	8/07	TBS テレビ	脳力探検クイズ！ホムクル	血液型性格診断は世界でもあてはまるのか!?	伝統的, 進化論
8	8/20	関西テレビ	モモコ×菜摘×よし子 おじょママ	血液型で性格や行動を大検証！	伝統的
9	9/05	テレビ朝日	決定！これが日本のベスト 100	血液型ランキング	伝統的, 進化論, 脳・部位
10	10/03	フジテレビ	発掘！あるある大事典 II	秋の芸能人血液型スペシャル	伝統的, 脳・部位
11	10/07	TBS テレビ	超スパスパ人間学！（関東）	血液型ダイエット	3次元
12	10/24	テレビ朝日	決定！これが日本のベスト 100	決定！超最新!! 血液型データランキング SP	伝統的, 脳・糖鎖
13	11/07	フジテレビ	ジャンク SPORTS	血液型とスポーツの相性 検証！ スーパーアスリートの血液型	伝統的
14	11/14	フジテレビ	笑っていいとも！増刊号	40 パターンの血液型占い	40 パタン
15	11/22	テレビ東京	月曜エンタァテイメント	心と体の血液型大診断 3 時間スペシャル！	伝統的, カラーセラピー, 音響
16	12/28	TBS テレビ	ABOAB 血液型性格診断の ウソ・ホント	本当の自分 & 相性探し 来年こそは開運 SP !!!	伝統的, 3次元
17	05/1/01	フジテレビ	最強運芸能人決定戦。2005 年は こいつののれスペシャル	血液型占い 最強 40 ランキング	40 パタン
18	1/16	TBS テレビ	アッコにおまかせ！	週刊おまかせ芸能 2005 年は A 型カップル 破局の年	折衷
19	1/26	フジテレビ	水 10！	コリコミラクルタイプ こんな女は 嫌われる SP 血液型人間マキコ	伝統的
20	2/12	フジテレビ	マツケン・くりいむの... 珍説! ? 奇天烈学会	血液型による性格分析は 30 万人という膨大な データをもとに作られたれっきとした統計学 である説	伝統的, 脳・糖鎖
21	2/14	テレビ東京	月曜エンタァテイメント	心と体の血液型大診断 3 時間スペシャル II	伝統的

注. 放送日は、関東地区でのみ放送された No. 11 以外は関西地区のものである。